

プラントハンターが見た100年前の東京

現在、東京・上野の国立科学博物館で開催中の企画展「100年前の東京と自然」では、植物学者E・H・ウィルソンが、大正初期の日本を訪れ、国内を撮影した当時の写真が並ぶ。そこには失われた東京の風景と、今もなお命をつなぐ樹木の姿が写し出されている。同展に合わせて、『100年前の東京と自然 プラントハンター ウィルソンの写真』(八坂書房)を上梓した作家の古居智子氏に、現代に語りかけるウィルソンの写真の意義などについて聞いた。



古居 智子さん

米国に残された写真

鹿児島・屋久島の巨大な杉の切り株で、その名が知られるアーネスト・ヘンリー・ウィルソン。彼は何を目的に屋久島を訪れたのか、日本の他の場所には訪れなかったのか。そして、当時の日本をどのように、どんなことを思ったのだろうか。それらは、これまで知られることはありませんでした。

国内の文献には、その足跡がほとんど記されていないウィルソンですが、海外の文献を調べるうち、彼は英国人で、独学で植物学を極め、さらにプラントハンターとして中国に4度派遣されるなど多くの業績を残していることがわかりました。



E・H・ウィルソン (1876-1959) ©President and Fellows of Harvard College, Arnold Arboretum Archives.

に雇用されたことから、日本の植物調査の旅が実現したのです。

ウィルソンの素顔が明らかになるなか、彼の足取りをさらに目に見えるかたちで示してくれたのが、アーノルド樹木園に残されていた7000枚を超えるウィルソン撮影のガラス乾板の写真でした。その中には、沖縄から北海道に至る100年前の日本の姿も残されていました。

戦争の傷痕に気付く

この高品質の写真の存在が、ウィルソンの日本での仕事をより確かなものにしていくのではないかと思います。当時の最新機器を使って植物を撮影し、その一枚一枚に、撮影場所、日時、学名などが正確に記されています。さらに彼の写真には、植物そのものだけでなく、植物の背景に山並み、田園風景、建造物や人物などが写し込まれてい

文化

て、植物が生息する環境そのものを表現しようという撮影者の明確な意思が伝わってきます。

今回の企画展の中で好きな写真の一つである、恩方村(現・八王子市) 皎月院の「シダレザクラの古木」は、桜を撮ると同時に、その桜が生息する里の雰囲気、大正初期の日本の村の姿を見事に切り取っています。

さらに、写真の陰影や構図などに高い芸術性や強いメッセージを感じるものが多く、これらを考え合わせると、ウィルソンの写真は数多くの情報を含めた貴重なドキュメンタリーでもあると考えています。今回の企画展の前に、

大正初期の日本を撮る

失われた風景と命をつなぐ樹木

「ウィルソンが見た沖縄」を開催したことから、戦争による環境破壊がいかに衝撃的なことかを実感していた私でしたが、大正初期のウィルソンの写真に今の東京の姿を重ね合わせる時、改めて戦争の傷痕の深さに驚きました。

大正3年といえは、明治維新から約50年、日本は西洋諸国に一步でも追いつくために近代化の道をまい進した時代でした。そして、その中心であった首都・東京で風景や樹木にカメラのレンズを向けました。彼が首都圏で撮影した写真は、計223点が今に残っています。

しかし、その後、東京は関東大震災、東京大空襲という災禍を経験し、東京オリンピックでは、その姿を大きく変貌させていくことになりました。今回の企画展の前に、

過去の記憶との対話

ウィルソンが生きた時代、写真撮影は大変な労力を伴うものでしたが、ある時、新聞記者に「どうしてそのような苦勞を重ねながら、写真を撮っているのか」と聞かれ、彼は「今、記録を残さなかったら、100年後には、その多くは完全に消え

てしまうだろう」と答えています。私は、この言葉に出合った時、はっとしました。100年後、それは今じゃないかと。植物学者の論文などで紹介されることはあったかもしれませんが、こうして彼の写真が一般の人の目に触れることは、この1世紀の間、なかったといっているようにも思えます。

ふるいともて 大阪生まれ。米ボストンでジャーナリストとして活動後、1994年、屋久島に移住。日本と欧米の交流史や島の歴史、文化、自然などをテーマに執筆活動をする。著書に『ウィルソンの屋久島』『ウィルソン 沖繩の旅 1917』『密行 最後の伴天連シドゥティ』などがある。

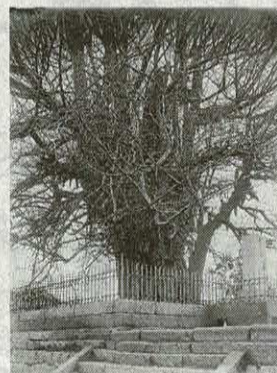


シダレザクラの古木 恩方村(現・八王子市) 皎月院



シメイヨシノ 江戸川(現・神田川) 沿いの桜並木

©President and Fellows of Harvard College, Arnold Arboretum Archives.



イチョウの古木 善福寺(麻布) ©President and Fellows of Harvard College, Arnold Arboretum Archives.

企画展「100年前の東京と自然」プラントハンター ウィルソンの写真から」は、6月16日(日)まで、東京・上野の国立科学博物館 日本館地下1F多目的室/地球館1Fオープンスペースで開催中。開館時間は午前9時から午後5時。休館日は月曜日(6月10日は開館)。入館料は一般・大学生620円、高校生以下及び65歳以上無料。

東京大空襲で焼け落ち、昔一画で静かに命をつないでいる樹木の姿を見つづけることもできました。下方に伸びた乳柱が逆さになった枝のように見えることから「逆さイチョウ」と呼ばれる麻布・善福寺のイチョウは東京大空襲で幹の上部が損傷しましたが、見事に再生し、樹勢を回復していました。